
あと一分の猶予を

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あと一分の猶予を

【Zコード】

Z3070B

【作者名】

滾

【あらすじ】

某大国の宇宙ステーションから伝えられたのは“地球最後の日”についてだった。

上 通告と平穏

アメリカの宇宙ステーションから全世界に向けて放たれた一通のメールは、全世界を震撼させる威力を持っていた。

『残り一日で地球は隕石の墜落によつて終わる』

なんでも、本来月の向こうを通るはずの彗星が、遠くの惑星の爆発に伴つて飛来した破片に衝突して方向を変え、地球に向かっていると言つ。

その宇宙ステーションの今までの功績は素晴らしい、誰もその話を疑う事もなかつた。

あと一週間を待たずに今年を終えるのに・・・。

各国の大名達はどうするかを迷つた。

国民に知らせるべきなのか、それとも黙つておくべきなのか。

迷つたが、答えは中々早く出た。

世界に終わりを告げよう。

これは、全世界満場一致で決まつた事だつた。

最後だ。

どうせ最後なら、教えてやる。

そうして、今俺はその内容をニュースで見るに至つてゐるわけだ。いいのか?と、俺は思つた。

こんな事を世界に放送してしまつて、暴動等は怒らないのだろうか?そんな不安もあつたが、何故だろ。世界は何時も通り回つていた。

決算売り尽くし！と、銘を打つて、スーパーやら「パートで安売りが始まりました。

決算も何も、もはや金なんの意味も無いのに。

それでも、働く人は働いていた。

俺が見ていたニコース番組の中で、女性キャスターがこんな事を言つていた。

『私はこの仕事をしていて、今までとても楽しく過ごしてきました。今、私がここで皆さんに最後までニコースをお伝えすることに、私は一切の悔いを持つていません』

TVの中で、拍手が起つた。

俺も、拍手していた。

街でも、同じような事が起つていた。

バス、タクシー、電車、新幹線は無料で走り、出来る限り誰もを会いたい人に合わせようとした。

TVでは芸能人が全員集合し、最後の時までパフォーマンスをやり続ける事を誓つた。

お笑い芸人や、歌手が、マジシャンが、凡そ考え方全くの人達がTVの中に集合した。

ああ、と、俺はTVを見ながら泣いた。

そして思つた。

無駄じやなかつた、と。

今まで、俺達が何気なくでも生きていた事は、全く無駄じやなかつた。

TVに「写る芸能人達は、これまでになく輝いて見えた。

『会いたい人に会つて下さい。私達はここで、最後まで全てをやりきります』

TVの中で、演歌界の大物歌手がそんな事をいつた。

そうだ。

誰か、誰かの所へいこう。そう思つた。

親、親は何をしているだろう？

俺はすぐに電話を掛けた。

案外スンナリと、電話はつながった。

『もしもし?』

電話に出たのは母だった。

俺は涙を堪えながら、

「大丈夫か?」と言った。

『賢治かい? 大丈夫って何がね? 大丈夫よ。アンタは?』

「ああ、大丈夫だよ」

涙を堪えたいのだが、いかんせん、流れ出るもののはもうビリビリしようもない。

『終わってまうってねえ・・・』

電話の向こうで、母が言った。

『終わっちゃうな・・・』

俺も、答えた。

『母さんねえ、アンタを産んで良かつたと思つとるよ
母は言つてくれた。』

俺の目から、生まれてこの方流した涙より、もつと多いであろう涙
が流れた。

「俺も・・・」

俺は無理やり声を絞り出して、

「母さんの息子で・・・、良かつたよ・・・」

答えた。

言えた。

『うん・・・、うん・・・』

電話の向こうで、母が泣いているのが解った。

母は最後に、帰つてこなくてもいいから、会いたい人に会え、と俺
に言った。

これが母との最後の会話になるのだろうが、俺はいつものように電話

話を切つた。

涙を拭くと、もうそれ以上は流れてこなかつた。

会いたい人

電話を見つめて、考える。

いや、考える必要は無かった。本当は心のどこかでさつきから思い出してはいた。

友人、のフォルダから、一人の女性の名前を探し出す。こつちに越してきた折、分かれてしまった彼女だった。会えるだろうか。

電話に出るだろうか。

考えているうちに、

プルルルルル・・・

電話が鳴った。

誰だ・・・?

ディスプレイを見る。

と、

今まさに、フォルダ内から探し出した、その彼女からだった。俺はすぐに電話にでて、

「もしもし」と言った。

少し、声が裏返つてたかも知れない。

『もしもし?』

と、声がした。

間違いない、あの声だった。

声は言った。

『会えないかな?』と。

『もう、着いてるんだ。そつちに』と。

俺は気づくと、答えていた。

「会おう」

と。

俺は部屋を出ると、バイクに跨って、いつもより賑わっている街の中を駆けて行つた。

上 通告と平穏（後書き）

二話完結の話です。

楽しむ話ではあいませんが、心が揺れれば幸いです。

中 再開

俺の予想は本当に外れていた。

俺の予想通りなら、街全部がボロボロになるまで壊されて、そこらじゅうで人が殺しあっているはずだった。

が、寧ろ街は平和そのもので、最後だからみんなで騒げりうぜ、見たいなムードで溢れかえっている。

いかに自分が漫画、映画に影響されていたかが身にしみて、少し恥ずかしくなった。

もはや全く意味の無くなつた信号を無視して、駅まで奔る。この道も、この行きと帰りの一回しか見れないのか、と、少し泣きそうになる。

が、何とか堪えて前を見直す。と、もう駅が見えてきた。

俺は賑わう人達を躊躇かないように気をつけながら、それでもスピードを上げつつ俺は駅へと急いだ。

やはり駅とあつてか、人の通りは多い。

その中から、彼女の姿を見つけようとする。

プルルル プルルル

不意に、ポケットの中に入れておいた携帯が鳴つた。急いで取出して、耳に当てる。

「もしもし？」

『あ、もしもし？』「ち、見える？私もう見つけてるんだけど

『え？あ、どっち？』

『こっちこっち。右、かな？右の方手え振つてるよ』

言われるがままに、右を向く。

少し目を見張つて、それらしい姿を探してみる。

が、皆待ち合わせをしているのだろうか。何人かの人が手を上げていた。

「え、どこ？悪い、もう一回教えて」

『だから、こっちだつて』

「だからどっちだよ？」

『だから』

と、何故か回線が切れた。

「あ、え？ もしもし？ もしもし！？」

うろたえて携帯に叫んでみるが、

ツーツーツー・・・

切れていた。

「あれ？ おかしいな」

と、ディスプレイを見ていると、

「だーれだ？」

目をふさがれた。

「さ、里美・・・？」

答えると、「大正解！！」の言葉と共に俺の視界は開けた。

急いで振り返る。

「久しぶりだね」と笑う里美は、分かれたときより少しだけ、少しだけ、大人っぽくなっていた。

バイクの後ろに里美を乗せて帰ってきた。

途中、里美が色々話しかけてきたが、何故か上手く答えられず、俺は聞こえないふりをしていた。

「入れよ」

部屋の鍵を開けて、里美を中に入れる。

別にこんなこと、付き合つてゐる時は普通だったのに、何故か知らな
いけども恥ずかしかった。

「お邪魔します」

地球最後の日の一日前だと書つのに、律儀に靴を脱いであがつてい

く。

だから仕方なく、俺も靴を脱いで部屋に入った。

「あ、部屋の中は綺麗だね」

「そうか？」

「付き合つてるときも部屋綺麗だつたもんね。私一回彼氏の部屋掃除してみたかったのに、ケンちゃんの部屋綺麗だつたから掃除できなかつたし」

そうだつたか？と、俺はクッショוןの上に腰掛けた。

その隣にクッショൺを置いて、そこに里美を座らせる。

「・・・・・・・」

別に話す事も思い浮かばず、俺は黙つたまま壁に掛けてある時計を見た。

こうしている間にも、時計の秒針は一秒一秒進んでいる。時が進むにつれて、残された時間は減つていいく。

何かそれがおかしく思えて、俺は一人少し笑つた。

それを不振そうな顔で里美が見ていたが、構わず俺は笑つていた。

「ねえ」と、口火を切つたのは里美だつた。

「ねえ、私と別れたあと、誰かと付き合つた？」

「・・・いや」

そういうえばあれ以来、誰とも付き合つていなかつた。

別に女好き、というわけじゃなかつたが、それまでは女とはそこそこ付き合つてきていたのに。

「そつか・・・」

と頷いた里美は、少し複雑そうな顔をした。

「私はね、付き合つたよ」

「・・・そつか」

何故か少し胸が痛くなつて、俺は顔を顰めた。里美が付き合つていたと知つたからだろうか。もしくは、里美と別れてしまったからだろうか。

ああ、両方かも知れない。

ともかく、胸が痛かつた。

「そっか……」と俺は言つた。

「そっか……」と。

そんだけしか、言葉が出てこなかつた。

「けどね」と、里美が言つた。

「すぐに別れちゃつたんだ。一週間くらいで

「……何で？」

「何でだろうね？」

里美は悪戯っぽく笑つた。

何でだろうね？と。

「ああ……、何でだろうな……」

咳いて眺めた空は、日が暮れて少し暗くなつていた。

中 再開（後書き）

少し展開が速いです。

下 一分の猶予

「街に出よう」

そう言つたのは里美だつた。しかも朝早く。里美は結局俺の部屋に泊まつていつた。かと言つて何もなく、本当に何もなく夜を明かした。

俺は床で眠るハメになり、起きたら体中が痛かつた。が、里美のテンションショーンでは乗らないと後が怖そつた。まあ、 “後” があるのかどうかは解らないが。

服を着替えて、俺は里美と一緒に外に出た。里美は持つてきていた服を着ていた。

里美の服の感じは、俺と付き合つてゐる頃とやはり少し違つていて。俺はどうだらう、と、そんな事が少し気になる。

バイクで行こうと俺は提案した。が、会話が間々成らないから、と、里美が却下した。ものの一秒の却下だつた。

街を里美と二人で歩いた。昨日はバイクだつたから、昨日とは違つ

感じで少し恥ずかしかつた。

里美にそれを気取られないように歩いた。

里美は楽しそうにしていた。そう振舞つていたのかもしけないが、楽しそうではあつた。

俺も案外楽しんでいたと思つ。

“普通” に服屋に入り、「服を今更買つても意味が無い」 等という会話をしていた。

そんな会話だつたけど、不思議と空氣は重くなることは無かつた。

その後は “普通” にぶらぶらと街を歩いた。その間、昨日の話の続きを話題に持ち上がつた。

「私ね、やっぱりケンちゃんの事が好きだつたんだ。だから、その

後も長続きしなかつたんだね」

そんな事を、やけにあつさりと言われてしまった。

昨日はあんなにじらした言い方をしていたのに。

「 そうか・・・

俺もそうだったかもしない。とは、俺は言えなかつた。
いや、場の空氣的には、これ以上にないタイミングなのだろう。だけど、それを言う勇気が無かつた。

認めるのが怖いのだろうか。怖いとは何だろうか。そんな事を考えていると、

「ケンちゃんは意氣地なしだなあ。相変わらず」

と里美に言われた。

“相変わらず”。

この言葉がやけに頭の中で反芻される。

俺は悔しくて、里美に見られる“相変わらず”を何とか探そうとした。

相変わらず・・・・、服は変わっていた。

相変わらず・・・・、雰囲気も少し大人びていた。

相変わらず・・・・、何だろう・・・?

必死になつて里美の“相変わらず”を探したのに、結局見つからなかつた。

相変わらずなのは、俺だけだつた。

昼になつて、俺は昼飯に里美を誘つた。誘つた、といふか、「あそこで昼飯を食べよう」と言つただけなんだけど。

そこは普段じや滅多なことじやないと入れないような、超高級な料理店だつた。

今は普段じやなかつたし、滅多なことだつたから入れたのだ。

最後だから全財産使い切るつもりで入つたが、店員が「今日は全メニューワンコインです」と言つた。

最後に客に感謝したい、という店長の計らいらしい。

ああ、男らしいな。と思った。まあ、男じゃないかもしれないが。食べた料理は上手かつた。多分。ああ、どうなんだろう。もしかしたら牛丼の方が上手いかもしない。

里美はナイフとフォークの使い方が上手くなつていた。やつぱり俺だけ“相変わらず”子どもだつた。

五時を回つた。何が、と聞かれれば、時間が、だ。

正確？に言えば十七時だ。残つた時間はあと七時間しかない。

その“後七時間”に、妙に実感が沸かない。

まあ、だからこそその平穏なのだろうと思ひ。

街には依然として人が溢れていた。その中で、段差を見つけて里美と隣り合つて座つている。

何故だろ？その人達の全員の顔が、楽しそうに見える。中には子ども連れの家族も見える。子どもは母と父に挟まれて無邪気に笑つていた。

あの子は、これからどうなるか解つていいのだろうか。“これから”が訪れないことを、知つてているのだろうか。

そんな事を考えていると、里美がふとその家族を見ていつた。

「いいね」と。

何がいいね、なのか、一瞬わからなかつたが、「いいな」と俺は言つた。

適当に答えたんじやない。ちゃんと里美の言いたい事はわかつた。

「私、あんな家族が欲しかつた」

楽しそうな家族を、羨ましそうな、悲しそうな顔で見つめている。俺はそんな里美を見ていた。

それに気付いているのかい？のなか、里美は家族連れを見たまま続ける。

「でも、もうダメなんだよね。何でだろ？・・・、何だろ？ね・・・

」

どんどん声が湿つぽくなるのを感じる。

答えを求めているわけじゃなさそうだから、俺は黙つて聞く。

「私、何かしたかな・・・。何で、何でこうなのかな・・・？」

「いよいよ田に涙が溜まっている。俺は溜まらず、里美を抱き寄せた。

里美は涙を堪えて、尚も続ける。

「あれかな・・・、ケンちゃんと別れちゃつたから、バチが当たつちゃつたのかな・・・。そうかな・・・、そつなのかな・・・」

泣き出した里美の頭を撫でてやる。

気付くと、俺は喋っていた。

「それでも」と。

「それでも、いいじゃん」と。

「それでもいいよ。今から、また作ればいい

自分で言つていてよく解らなかつたが、気持ちは伝わつたかな、と思つ。

「でも、もう時間無いよ・・・？」

伝わつてなかつた。だけど、と補足をする。

「短い間でもさ、覚えてよ。俺達が、今から、最後までちゃんと生きて、寄り添つてることを

な?と俺は里美の頭をまた撫でた。

「子どもじゃないよ・・・」と、里美は笑つた。

それでいい。

それでもいい。そう思う。

里美は会わないうちに変わつていた。少しだけど、確実に。

俺は、どうだか解らない。少なくとも、里美よりも“相変わらず”が多かつた。

それでもいい。

今まで、じゃなく、“これから”だ。

大事なのがこれから。

今まで積み立てた事が、例え無駄だつたとしても、それでいい。

またこれから、短くても積み立てればいい。たとえ積み立てられる

“モノ”が低くとも、それでもそれは必ず“残る”。

全ては終わったとしても、それは“残る”から。
最後まで、寄り添つて。

今から、と、俺達は“最後”を待つた。

二十三時五十五分だ。

“残り”あと五分。それでも、俺達は積み立てた。
もう有り得ない“これから”を語り合い、ちゃんと証を残した。
だから、俺に不安は無かった。恐らく、里美にも。
周りを見回す。いつの間にかあれだけ居た人は居なくなっていた。
残されたのは俺と里美と、最後を告げる時計だけ。

「里美・・・」

俺は里美にこちらを向かせた。

俺の意図はスグに里美に伝わったらしい。

里美は静かに、瞳を閉じた。

時計が静かに、時間を刻む。

俺はゆっくり、里美の唇に俺を重ねた。

そのまま、思う。

俺さ、と。

俺、不安だったんだ。多分。ずっと。

成長してるお前見て、不安だったんだ。でも、そんなの関係なかつた。お前はお前で、俺は俺だった。

なあ、そうだろ。これでいいんだよな。

そんな事を、ただ頭の中で里美に語りかける。

ああ、ちゃんと伝わったかな。ああ、伝わっただろうな。きっと。

大丈夫だ。

時計は静かに時を刻む。

残り一分。

ベルが鳴り、最後を告げる。

もう“終わる”。もう時間だ。

あ、と思う。

それでも、と。

神様、最後にどうか、あと一分だけの、猶予を

時計の針が、重なつて、“終わり”が告げられて

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

俺は寝ぼけ眼で時計の針を止めた。

何だろう。凄い“夢”を見ていた。

俺が元カノと最後の日に何かを確かめあう夢だった。

残念ながら世界は終わりを告げていないし、こうして日常はこれからも続きそうだ。

ただ、ただ、と思う。

どうせあんな夢を見たんだ。元カノに、久しぶりに連絡してみてもいいかな。と。

それにして、どれにしても、ともかく神様。

俺に、後一分だけ、猶予を

下 一分の猶予（後書き）

最終話です。

オチがついてしまいましたが、楽しんで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3070b/>

あと一分の猶予を

2010年10月21日20時21分発行